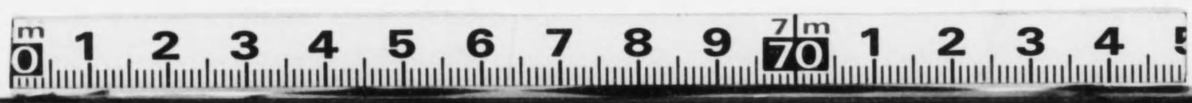

特248
711

711

森師講述

保險學

第二分册

昭和七年度法政大學講義

特248
711

保險論　目次

第二分冊

各論……四四
生命保險
第一章　生命保險ノ種類……四四
第二章　生命表……四四
第三章　保險料ノ計算……四九
第四章　責任準備金……五六
第五章　生命保險ノ諸問題……六七
火災保險
第一章　保險料ノ標準……八一
第二章　危險ノ測定……八四

保険料積立金トハ生命保険ニ於テ保険料ノ方法ヲ示ル為ニアツテ年ニ及ビ死亡率ガ高クナル結果トシテ多クノ保険料ヲ必要トスルガ、ソノ負担ガ困難トナル為ニ保険契約ノ初期ニ於ケル死亡率ノ低キ時代、保険料ノ安イ時代ニ於テ必要以上ノ保険料ヲ徴収シ、ソノ余ツタ金ヲ蓄ヘテオイテ后年ノ保険料ノ不足ヲ補ヒソシテ保険料ハ始終同額トスル事ガ現今一般ニ行ハレテ居ル、コノ積立金ガ未経過保険料ニアル、

ソシテ決算期ニ於テ個々ノ契約ニ就テ之ヲ計算スル事ハ繁雑ニアルカラ、他数平均シテ一定割合ノ積立金ヲ為ス、即チ平均スレバスベテノ契約ガ年ノ中頃ニ契約サレタモノト考ヘテ計算ヲ行フ、従テ第一年度ノ契約ハ六ケ月第二年目ノ契約ハ一年ヲ経過シタモノト考ヘテ之ヲ計算スルモノニアル、

以上ノ外ニ責任準備金ト云フ名前ハナイガ之ト同質ノモノニ保険会社ガ契約上当然ノ義務トシテ植エネバナラヌ、例ヘバ確定金額配当積立金ノ如キ之レハ利益配当ハ契約ノ中ニ必ズ何程カノ配当例ヘバ払込保険料ノ幾%ヲ必ズ配当スル事ヲ契約シテ居ル場合ガアル、斯ノ如キ場合ニハソノ積立金ハ会社ガ義務ト

シテ為サネバナラヌノ元アル。例ヘバ戰爭ガ保積立金ヲ特ニ積立テル義務ヲ有スル会社アリ、仰々戰爭危險ハ一般ノ契約ニハ之ヲ負担シナイノデアルガ戰爭ニ於テ特別危險料ヲ払込マセ、ソノ危險ヲ負担スル事アリ、又平素カラ何程カノ割増保險料ヲ採リ之レニ由リ戰爭危險ヲ負担スル特約ヲ為セルモノアリ。之等ノ場合ニ於テソノ危險ノ為ニ特別ノ積立金ヲ為スコトハ会社ノ義務ナリ、斯ノ如キ種類ノモノガ責任準備金ト同性質ノ積立金ト認メルモノデアル。

次ニ保險業法施行規則ハ支払準備金ヲ必要トス、之ハ例ヘバ決算期ニ於テ損害ハ既ニ生ジテ居ルケレドモ、ソノ報告ガ未ダ届カナイカ、或ハソノ報告調査中デアリ、未ダ保險金ヲ支払ツテ居ナイカ、或ハ訴訟中ノモノ等ガアルトキハ会社ハ之レニ対スル支払ノ義務ガアルモノト考ヘ之ニ備ヘル為ニ適当ノ積立金ヲ計上スル事ヲ命ズル、尚、生保ノ如ク保險料積立金ノアル場合ニ保險料不払ノ為契約ガ失效スレバ、解約返戻金ヲ払戻サネバナラヌガ、之レハ二ケ年ノ短期時效ニカヽル事ニナツテ居ル、然シ時效ガ完成スルマデ之ヲ支払備金ノ中ニ加ヘネバナラヌ事当然デアル、

以上ノ外ニ保險会社ハ商法ノ定ムル所ニ依リ利益金ノ中カラ一定ノ法定積立金ヲナシ、為特別ノ必要ニ備ヘル為、任意ノ特別積立金ヲナシ、又快用人有選ノ為ノ積立ヲナスト云フ事ハ、一般ノ会社ト同様デアル、外國保險会社ニ対シテノ保險業法ノ中ニ特例ガアル、此ノ條項ニ依リ外國保險会社ニ対スル伴トイフ特令ト同ジ名前ノ省令トガアル、ソノ監督ト内容ハ内國会社ニ対スルト同ジ性質デアル、唯一ツ看シイ特例ハ供託金ノ制度デアル、之レハ外國会社ガ我國ニ於ケル事業ヲ廃止シ、本國ヘ引キ上ゲハ時又ハ國交断絶等ニ於テ保險契約者ガ保險金ノ契約ヲナスニ困難ヲ感ズ、斯ノ如キ場合ニ我國ノ被保險者ヲ保護スル為ニ責任準備金ト略同額ノ供託金ヲ我ガ政府ニナス事ヲ命ズ、ソシテ此ノ供託金ニ対シテ、我ガ國ノ被保險者ハ優先权ヲ有スルト定メラル、

各論

生命保険

第一章　生命保険ノ種類

我ガ商法ニ於テハ生保契約ハ人ノ生存又ハ死亡ニ關シテ一定ノ金額ヲ支払フ契約デアルト定メテ居ル、斯ノ如キ契約ノ締結ヲ一般ノ人々ニ対シテ大量的ニ行フ事ガ保険事業デアル、從ツテ我商法ノ解釈トシテハ人ノ生存又ハ死亡ノ保険ト考ヘネバナラヌ、然シ実際ニハヨリ廣イ意味ニモ考ヘラレ解釈サレテ居ル、最モ廣イ意味ハ生命保険ノ終身保険ニ限ルト云フ考ヘ方デアル、之ハ生命保険ノ発達ト、或ル時代ニ於テ終身保険ガ全盛ヲ極メタ時代ガアツタ沿革ガ今

尚人々ノ頭ニ斯ノ如キ狹イ印象ヲ殘シテ居ルモノト考ヘラル、生保ガ早ク発達シタ國々ニ於テモ一九世紀ノ前半ニ於テハ終身保険ガ專ラ行ハレテ居タ、從テ我國ニ於テモ生命保険ガ始メテ行ハレタ一八八〇年代ニ於テハ勿論同様デアツタ、第二之レヨリモヤヽ廣イ定義ハ生命保険ハ死亡保険ニ限ルト云フ思想デアル、之レハ第一ノ終身保険ノ外ニ、定期保険ヲモ含マセテ居ルガ、仰々生保ハソノ発達ノ初期ニ於テハ短期間ノ死亡ノ危険ヲ保険スル事恰モ海上保険、火災保険ノ如キモノトシテ起ツテ來タノデアル、ソレガヤ第二発達シテ、人口研究及ビ高等数学ノ発達ニ促サレテ長期又ハ終身保険ヲ科学的ニ行フヤウニナツタ、此処ニ現代的科学的生命保険トナルニ至ツタ、コノ沿革カラ云ヘバ生命保険即チ死亡保険トイフモ無理カラヌ、然ルニ生保ガ科学的ニ行ハルヽニ至ルヤ生存ノ場合ニ備ヘル貯蓄手段トシテ生命保険ノ方法ヲ利用スル事ガ行ハレ始メタ、之ガ生存保険デアル、此ノ場合ニハ貯蓄ノ手段ガ甚ダ濃厚デアリ、殆ド銀行預金ト大差ナク見エルガ、併シ保険ノ方法ニ依ル場合ニハ此講義ノ最初ニ述ベタ保険ノ特色ガ備ツテ居ルノデ貯蓄ト異ル、斯ノ如ク生命保険ガ行ハル、ニ及ンデ生死協合保険ガ自ラ生ジタ、我國ノ商法ガ保険トシテ考ヘテ居ルノハコノ程

度デアル、然ルニソノ后益々保険事業ガ発達シテ種々ノ附帯的條件ヲ加ヘタ生命保険ガ実施セラルニ至ッタ、即チ傷害條項、廃疾條項ガ加ヘラレタ生命保険ガ実際ニ行ハレテ居ル、之等ヲ生命保険ト見ルヤ否ヤニツイテハ異説ガアルガ私ハ之レヲ単ニ條件ヲ加ッタ生命保険ト見ル考ヘデアル。即チ其ノ本体ヲ為シテ居ルモノガ生命保険デアル。

之ト同様ニ徴兵保険ノ様ニ一定ノ年齢ニ達シタモノガ入営シタル場合、保険金ヲ支払フト云フガ如キ本体ガ生命保険デアリ、又他ノ條件ガ加ッタニスギヌ、又保険金ノ支払ガ通例ハ一時金ニ行ハレルガ、之レヲ一定ノ年金トシテ分割支払ヒ払ニナスベク単ニ計算上ノ問題ガアルニ過ギナイ。然テ近年ハ保険分割支払ヒノ契約ガ次第ニ盛ンニナル傾向ガアル、ソレト同ジ理由ニ依リ生命年金ノ契約ハソノ名称如何ヲ問ハズ生命保険契約デアル。斯ノ如ク実際ニハ生命保険ハ我商法ニ見ル事以上ニ拡張サレテ居ル、故ニ生命保険ハ、之レラ生存保険、死亡保険、生死混合保険ノ三ニ大別スル。

(1) 生存保険ハ一定ノ年数ノ終リニ生存シタル人ニ対シテノミ保険金ヲ與ヘルモノデアル、少年少女ニ対スル学資金、結婚資金、営業資金等ニ当テル為ノ保険ハ大体ニ於テコノ種類ノモノデアル。徴兵保険モ亦之レニ属ス、ソシテ年金保険ハ生存保険ノ性質ヲ有スルモノナリ。

(2) 死亡保険ノ中デ一定ノ期間ヲ定メテ其ノ期間内ニ死亡スレバ一定ノ保険金ガ支払ハルレド、然ラザルトキハ契約ハソノマヽ消滅スルモノヲ定期保険トイフ、其ノ中ニハ極メテ短イ一航海中ダケト云フガ如キモノ、或ハ一年間或ハ十年、二十年トイフ如ク分長期ニ渉ルモノ種々アル、コノ場合ノ保険ハソノ行ハルヽ状況ガ火災保険等ニ似タモノガアル。之レニ反シ一生涯契約シテイヤシクモ契約ガ有效ニ継續スル限リ何時死亡シテモ保険金ガ支払ハルヽモノヲ終身保険トイフ、コノ種ノ保険ハ余リ行ハレズ、我國保険業ノ初期ニ於テハ之ガ最モ盛ンデアッタ。而シテ学術的研究ノ対象トシテハ之ガ生命保険ノ代表的ノモノデアッテ、他ノ種類ノモノハ之レヨリ落チテセラルヽト云フ状態デアッタ。

(3) 一契約中ニ生存保険、要素ト死亡保険ノ要素トヲ結合シタモノガアル、コ

ノ生死混合保険ノ中デ最モ長ク世間ニ行ハルヽモノハ養老保険デアル、コレハ今后何年間又ハ何才迄生存スレバ保険金ヲ支払フガ又一方ニハ其ノ期間内ニ死亡シテモ保険金ヲ支払フト云フ、即チ生存保険ト定期保険トヲ結ビツケタモノデアル。コノ種類ノモノハ好ミニ適スルガ故ニ現今我國ノ生命保険中九十%以上ハコノ契約デアル、此処ニ注意スベキ事ハ第一ニ述ベタ生存保険中デ純粋ニ生存保険トシテ行ハレテ居ルモノハ極メテ稀デアル、最モ普通ハ生死混合保険ノ形デ行ハレテ居ル、例ヘバ満二十才迄生存シタ人ニハ積立ン処ノ保険金ヲ返スト云フガ普通デアル。之ハ死亡者ニ保険料ヲ返還スル事、即チ死亡ノ際ニハ保険料ト同額ノ保険金ヲ支払フト云フガ生存保険ニ附加サレテ居ルノデアルカラ結局生死混合保険デアル、但シ此ノ場合生存保険ノ色彩ガ少ナイカラ、吾人ハ普通之レヲ生存保険トイッテ斗ル。之等ノ外ニ生命保険契約ニ発疾保険又ハ傷害保険ヲ附ケ加ヘテ之等ヲ一條項トナス所ノモノガアル。コノ場合ニハ例ヘバ病死者ニハ金一万円ヲ払フガ傷害ニ依ル死亡者ニハ其ノ倍額ヲ支払フ契約ガアル、其ノ理由ハイヤシクモ死亡者ニハ一万円ノ契約シ同時ニ一万円ノ傷害保険ヲ之レニ附ケ加ヘタルニ依リ、前例ノ保険ニハコノ二ツノ契約ノ條件ガ同時ニ成立スルノデ倍額ノ保険金ガ支払ハルヽワケデアリ、又疾病者ニ対シテハ其ノ状態ノ継続スル限リ其ハ保険料ヲ免除シ或ハ手当金ヲ與ヘテ生活費ヲ補ハシメルモノデアルガソレハ廃疾保険ノ效果デアリ、尚同時ニ生命保険ガ存在スルカラ死亡ノ際ニハ別ニ死亡保険金ガ支払ハルヽノデアル、

第二章　生命表

生命保険ハ人ノ生死ニ関スルモノデアルカラ、之レニ関スル統計的研究ガ基礎ニナル、カヽル統計的研究ノ結果ガ表ハサレテ居ルモノヲ生命表、又ハ死亡表、又ハ死亡生存表ト名ヅク。之ヲ用イテ保険料ノ計算、責任準備金ノ計算ソノ他種々ノ数字的基礎ニ用ヒラル、今之ヲツクル一ツノ例ヲ簡単ニ述ベル、例ヘバ國勢調査ノ結果トシテ年齢別ノ人口数ガ分ッタトスル、國勢調査

ノナイ場合ニハ市町村ニ於ケル戸籍簿ヲ材料トシテ之レヲ知リ得ル、又一方ニハ生々死亡ノ届出ヲ材料トシテ年齢別ノ死亡数ガワカル。シカル時ハ、或ル年齢ニ於ケル生存数ヲ以テ其ノ年令ニ於ケル一年間ノ死亡数ヲ割ルト其ノ年令ニ於ケル死亡率ヲ得ル。コノ死亡率ハ材料ノ不完全、其ノ他種々ナル偶然ノ事情ニヨリテ完全ナモノトハ云ハレナイ、之ヲ図ニ表ハセバキヨヘノコギリ（鋸状ヲ表ハス、然ルニ凡ソ人ノ死亡ニ関シテハ一定ノ秩序ノアルベキモノニシテ之ヲ図ニ示セバ曲線ヲ画クベキモノト考ヘラル、従ツテ数学上ノ手續ヲ用ヒテ上ノ如キ粗製死亡率ヲ補整シテ完全ナ死亡率ヲ求メル、扨之ガ求メラレタ以上ハ或ル一定ノ年令例ヘバ國民全体ニツイテ云ヘバ命オヨリ又若シ、生命保険ノ被保険者ニツイテ謂ベントスルトキハ、十オ又ハ二十オ等適当ノ年齢ヲ出発点トシテ、ソノ点ニ於ケル生存者ノ数ヲ十万トカ云フガ如キ（Ecourcel, Hardy）ソノ点ニ於ケル生存者ノ数ヲ十万トシテ之ガ前記ノ死亡率ノ作用ヲ受ケ位次第ニ減少シテ行キ最後ニ零トナルマデノ状態ヲ一覧表ニ作成スル、之レニヨリテ完全ナ生命表ガ作成サレル、其ノ計算ノ手続ハ例ヘバ零オノ生存者数ヲ百万トシテ之レニ零オノ死亡率ヲ乗ズレバソノ一年間ニ於ケル死亡者ノ数ガ分ル、之ヲ百万人カラ引クト、年末ニ於ケル生存者即チ、翌年ノ始メ（満一オ）ニ於ケル生存者ノ数ヲ得ル、更ニコノ数ニ対シテ一オニ於ケル死亡率ヲ乗ズレバ一オニ於ケル一年間ノ死亡者数ヲ得ル、之ヲ一オノ年ノ始メニ於ケル生存者数カラ引クト一オノ年末即チ二オノ年ノ始メニ於ケル生存者数ヲ求メラル、次第ニカクノ如クシテ凡ソ百オニ近イ年令ニ迄進メル、今此處ニ内閣統計局第ニ表ノ男子ノ部ノ一部ヲ示セバ左ノ如シ、

	死亡率
三〇才	〇、〇〇七八七
三五才	〇、〇〇八六九
四〇才	〇、〇一〇四〇

之レハ計算ノ便宜カラ一人ノ軍位トシタ場合ノ死亡率ヲ抽象的ニ示シテ居ルノデアル。従テ具体的ノ場合ニ於テ例ヘバ三五オノ人ガ一〇〇〇〇人アルトスルナラバ一年間ニ約八六九人内外ノ死亡者ヲ見ルベキ予則デアル事ヲ示スノデアル、我ガ國ニ於テ生命保険業ガ始メラレタノハ明治十四年デアルガ当時ハ

余儀ナク外國表ヲ用ヒタ　后明治二十二年ニ藤沢氏カ日本帝國統計年鑑ヲ材料トシテ簡單ナ生命表ヲ作ツタ、其ノ後コレニ倣ツテ略同様ノ材料ニヨリ作ツタモノガ森村表、楠表　等数種表ハレタ、併シ是等ハ何レモ充分ナル材料ニ基イテ作ツタトハイヒ難キ故ニ内閣統計局ニ於テハ別ニ完全ナモノヲ作ラントスルニテ明治三十五年ニ第一表ヲ作ツタカ更ニ四十四年ニ第二表ヲ作成シテ之レヲ「日本人ノ生命ニ關スル研究」ト題シテ出版シタ、此ノ書物ニハ死亡表ノ作成方法、用法等ヲ説明シ、且ツ此ノ死亡表ト一定ノ利率ニ基イテ計算シタ種々ノ價格表ヲ添ヘテアル故生命保険ヲ始メ、イヤシクモ人ノ生死ヲ條件トスル数学的計算ニ之ヲ用フル事カ甚タ便利ナル故今日ニ至ル迄盛ンニ我國ニ於ヒテ用ヒラレテ居ル、即チ民間ノ生命保険会社ガ之レヲ多ク用ヒテ居ルノミナラズ、逓信省ノ簡易保険及ビ郵便年金　朝鮮總督府ノ簡易保険ノ如キモ、コノ生命表ニ基クモノデアル、后ニ至リ大正七年ニ発表セラレ昭和五年ニ第四表ガ発表セラル。第三表迄ハ戸籍ニ基ク調査デアルガ、第四表ハ國勢調査ニ基クモノデアル。而シテ此ノ第四表ニハ第二表ニ於ケルト同ジク種々ナル價格ノ計算表カ添ヘラレテ

アルカラ、將来ハ次第ニ之ガ実用ニ供セラルヽナラン、以上述ベタ所ハ一般國民又ハ一定ノ地域ニ於ケル一般住民ヲ材料トセシモノナル故、之ヲ國民表ト云フ、コノ外ニ被保険者ノミヲ材料トスルモノ即チ保険会社ノ経験ヲ調査シタ所ノ生命表ガアル、之ヲ経験表ト名付ク、仮令同ジ社会ニ於ケル、同ジ時代ニ於ケル死亡状態ヲ調査シテモ國民表ニ表ハレルモノト経験表ノソレトハ異ナル、后者ハ一方ニハ保険会社ガ身体検査ヲシタ上ニ特ニ弱体者ヲ除イタモノデアル。然シ又金銭上ノ利害ガアルカラ、弱体者ガ稍々モスレバ好ンデ保険ニ加入セントスル傾向ガアル故ニ一種特別ナル死亡状態ヲ表ハス、從ツテ保険事業ノ基礎トシテハ寧ロ経験表ヲ基礎トスル適当デアル。此処ニ於テ明治四十四年ニハ日本ニ三会社生命表ガ発表サレタ、我國ニ於テ創業ノ最モ古クヨツ最モ基礎ガ強固ガ又最モ多クノ被保険者ヲ有シテ居タ三会社（明治十四、帝國二十一、日本二十二）ノ経験ヲ集メテ作ツタモノデアツテ約五十万人ノ健康体ノ男女ニ就イテ死亡保険ノ契約シタ人等ヲ調ベタ。コノ表ガ作ラレタ后デハ多数ノ会社ハ之ヲ採用スルニ至リ現ニ盛ンニ用ヒラル、然ルニ其ノ后二十年ヲ経タル今日ニ於テ

新ナル經驗表ヲ作ル必要ヲ認メ、商工省ノ中ニ委員會ヲ作リ、十九ノ会社（創立后十年以上ヲ經過シ、且ツ大正十二年九月ノ大地震ニ依リ材料ノ燒ケナカツタ会社ノミノ材料ニ就イテ、明治四十五年カラ昭和二年ニ至ル十五年間ノ事実ニツキ、健康体ノ男女四百七十万人ニ付イテ死亡保険ノ契約ヲ調査シタ、之レガ商工省日本經驗生命表ト名付ケテ昭和六年ニ発表サレタ、ソウシテ之レニ基ヅ種々ノ計算表ハ現ニ作成中デアル。將來ニ於テハ次第ニコノ表ガ多ク用ヒラルニ至ルデアラウ、以上ガ我國ニ於ケル生命表ノ沿革デアル、即チ我國ノ保険会社ハ一方ニハ多数ノ外國表ヲ使用シツヽ、他方ニハ之等ノ内國表ノ中デハ三会社表ト局ニ表トガ最モ多ク用ヒラレテ居ル、其ノ外ニ若干ノ会社ニ於テ特ニ個人ガ作成シタ表ヲ用ヒテ居ルモノガアル。我國ニ於テ用ヒラレテ居ル外國表ヲ述ベルト

(1) 英國十七会社表　コレハ一八四三年ニ英國デ作ラレタ經驗表デアルガ、英國ニ於テハ未リ用ヒラレズ、然ルニ約三十年ヲ経テ米國デ保険事業ノ監督法ヲ制定スルニ当リ、コノ表ヲ標準的ナモノトシテ、法律上公ニ認メラレタ多大其ノ後米國ニ於テ立レグ盛ンニ用ヒラルヽニ至ツタ　米國デハ特ニ之ヲ *American Table* ト呼ンデ居ル、

(2) ファアール表（*Farr's Table*）　我國デハファアール表ト云フノハ実ハ英國々民表第三表ノ事デアツテ一八六四年ニ英國ノ統計局デ作ラレタモノナルガ当時ノ局長 *Farr* 氏ノ名ニ依ツテカリ呼ブ事ガアル、抑々英國デハ一八四三年ノ第一表ヲ始メトシテ一九二一年ノ第九表ニ至ル迄國勢調査ノ行ハレタ度毎ニ國民表ガ作ラレテ居ルガ、其ノ中特ニ第三表ハ種々ノ計算表ガ作ラレタ為ニ英國ヲ始メ諸外國ニ今尚盛ンニ用ヒラレテ居ル、

(3) 米國經驗表　コレハ一八六八年ニ *New York* ノ一会社ノ經驗ニ基ク表ヲ発表シテ、コレヲ *New York* 州ノ標準的ノモノトシテ公認シタノデ次第ニ米國諸州デ之ガ用ヒラルヽニ至リ、一時ハ英國十七会社表ト其ノ勢力ヲ競ツテ居タガ、次第ニコノ表ガ廣ク採用サレ今デハ十七会社表ハ勿ド米國ニテハ姿ヲ隠シテ居ル、而シテ此ノ表ガ一般ニ採用サレテ居ル、

(4) 英國二十会社表　　コレハ英國ニ於テハ Institut of Actu-
aris Table トイハレテ居ルガ一八六九年ニ発表サレタモノデアル

(5) 佛國経験表　　一八九五年ニ仏國ノ四大会社ガソノ経験ヲ集メテ作ツタモノデ死亡保険ノモノト年金契約ノモノトニ種アル。

(6) 英國六十会社表　　コレハ一九〇三年ニ作ラレタモノデアル。

改米諸國デハコノ他種々ノ生命表ガアルガ以上述ベタ六種ガ現ニ我國デ採用サレ、前ノ会社ハ多数ノ会社ガ採用スルガ後ノ四ツハ一二ノ会社ガ採用スルニ過ギヌ、

第三章　保険料ノ計算

今試ニ一年満期ノ定期保険、即チ一年内ニ死ン丸時ニ限リ保険金ノモヲヘル保険ニツイテ計算ヲスレバ保険料ニ関スル一般ノ公式ガソノマヽ適用サレル、即チ（死亡率）×（保険料）＝（死亡率）デアル。今一ツノ生命表ニ於テニ〇オノ人ノ死亡率ガ〇、〇〇八四ニセデアルトスレバ保険金一〇〇〇円ニ対シテハ 1000円×0.008427＝8.427円 ガ保険料デアル。何トナレバ之ト同一ノ被保険者ガ一万人アレバ保険料収入ハ 8.427×10000＝84270円 デアル。然ルニ他方ソノ一年内ニ死ヌデアラウト予想サレル人ノ数ハ 10000×0.008427＝84.27 即チ八四人デアル。ソノ各々ニ対シテ一〇〇〇円ヲ與ヘルナラバ八四〇〇〇円ヲ要ス。此処ニ於テ保険会社ハ収入ト支出トガ一致スル。但シ右ノ計算ニ於テハ利子ヲ無視シテ居タガ金ハ悉ク保険契約ノ年末ニ支払フモノト仮定スレバ、右ノ保険料ハ一年分ノ利息ヲ六ケ割引セラルヽ。従ツテ年利四分トスレバ八円四二ニ未七厘十（一一十〇、〇四）＝八、一〇三円ヲ以テ足ル予定トナル、右ノ如キ計算ハ所謂自然保険料ノ方法ヲ以テ計算サレタノデアル。

従ツテカヽル契約ヲ毎年継続スルナラバ差年ニ及ンデハ一年間ノ保険料デモ非常ニ多額ニナル、コノ不便ヲ避ケル為平準保険料ノ方法ヲ一般ニ採用スルト云フ事ハ既ニ説明シタ、

今若シ長期ニ亘ル定期保険ニツイテソノ保険料ヲ計算セントスルナラバ上述

ノ方法ヲ繰返シ各々ノ年齢ニ於テル保険料ヲ計算シタ上ニ尽ク之レヲ現價ニ換算シ、其ノ合計ハコノ契約ニ対スル一時払ノ保険料ニアル、然ルニ実際ニ於テハ一時払ノ保険料ヲ払込ムガ如キハ極メテ稀ナ事ニアル。普通ニハ平準保険料ノ方法ニヨリ、毎年同額ヲ払込ム、従ツテコノ一時払ノ保険料ニ相当スル金額ヲ年賦ニ換算スル必要ガアル、然ルニ年金ニハ二種アリ、一ツハ單ニ期間ダケヲ考慮ニ入レタモノニアリ、之レヲ確定年金ト云フ、他ハ人ノ生存又ハ死亡ト云フ如キ特殊ノ條件ヲ加ヘタモノニシテ之レヲ生命年金トイフ、例ヘバ官吏退職者ガ受ケル終身年金ノ如キハ后者ノ例ニアル、今前述ノ一時払保険料ヲ年払ニ換算スルニ当リテハ、保険契約ノ内容ニ従ヒ生命年金ノ計算ニ依ラネバナラヌ、即チ生キテ居ル限リハ契約期間内毎年保険料ヲ定期ニ払込ムヲ要スルガ死亡スレバ直チニ保険料ヲ受取ルノミナラズ、其ノ後ノ保険料ノ払込ミヲ免除セラル、故ニ單純ナ確定年金ノ計算ト違ヒ生命保険数学ノ特殊ノ智識ヲ必要トスルカラ、今此処ニ省略スル、然シ普通ノ年金ニ生死ト云フ條件ヲ加ヘタバケノ差ガアルノニアツテ著シク異ル所ノモノニハナイ。

上ノ例ニ於テ保険ノ期間ガ長期ニ亘ルニ従ヒ其ノ計算ハ甚ダ困難ニナル。従ツテ此ノ計算ヲ簡單ナラシメル為生命表ニ單純ナル原表（之レガ普通ニ生命表又ハ死亡表ト称セラルルモノニ・死亡率・生存率・生存者ノ数死亡者ノ数等ヲ一覧表トシテ示シタモノニアル）ノ外ニ基数表ガ添ヘラレテアル、之レハ保険数学ノ計算ニ於テシバ〳〵表ハレル数値ヲ一覧表ニ示シタモノニアル、而シテ保険数学ニ於テハ普通ノ代数式ノ計算ノ外ニ特別ノ記号ト記数式ヲ用ヒテ計算スル方法ヲ定メテ居ル、従ツテボメントマル値ヲ記数式ト記数表トヲ用ヒテ極メテ簡單ニ見出ス事ガ出来ル、コノ場合ニハ單純ナ算術ノ問題ニ帰着スル、例ヘバ上述ノ例ニ於フナラバソノ年齢ノ平準保険料ハ

$$\frac{N_{30}-N_{30+10}}{N_{30-1}-N_{30+10-1}}\qquad\frac{N_{30}-N_{40}}{N_{29}-N_{39}}$$

トイフ記数式ニ表ハサレル、故ニ下ノ如キ記数表カラ必要ノ数字ヲ求メテ導術的計算ヲ行ヘバ足ル事トナツテ居ル、

年齢	M	N
29	1	1
30	1	1
39		
40		

スナワチ、累約九年間ノ保険料ハ

$$\frac{N_{29}-N_{x+2}}{N_{x-1}-N_{x+2}-1}$$

大。

終身保険ニアリテハ前述ノ定期保険ニ於ケルト同ジ方法ヲ死亡表ニ於ケル最后ノ年迄続行スル事ニ依リテ一時払ノ保険料ガ求メラル。之ヲ年払トナス為ニハ之ニ該当スル生命年金ノ原價ヲ以テ除スレバ足ル、今之ヲ記数式ニ表ハセバ年払ノ保険料ハ $\frac{M_x}{N_{x-1}}$（xハ年齢）トナル、従ツテ若シxヲ三十オトシテH表ト年利子賦ト共ニ計算シタ　数表ニ依ルト $N_{30}=83444.01$　$M_{29}=5014.7$ ナル故　0.01684　トナル、之ハ保険年ヲノトシテ計算スルモノナル故一〇。

0円ナレバ　0.01684×10000=168円40銭　トナル。而ニ基数式ノ計算ニ於テ表ハレタ如ク　$N_x=D_x+D_{x+1}+D_{x+2}+\cdots\cdots$　ナル無限級数トスル事ガ出クカラ行ハレテ居ル、之レハ数学ノ計算ノ上カラ、自ラカクノ如キ形ヲ採ル、然ルニ若シ N_{x-1}ヲ N_x ヲ、N_xトシテ表ハシ之レヲ基数表ニ掲ゲルトキハ　$\frac{M_x}{N_{x-1}}$ ヲ $\frac{M_x}{N_x}$ ヲハ $\frac{M_x}{N_x}$　トナル故ニ基数表ヲ利用スル場合ニ便利ニナル、従ツテ近来ハコノ記号ヲ用ヒルモノガ多クナツテ来タ。

次ニ生存保険ノ準備保険料ヲ計算ヲ説明スル、先ツ一年満期ノモノ即チ一年ノ終リニ生キ残ツテ居ルモノ保険金ヲ與ヘルモノニアリテハ、例ヘハ一ツノ表ニ於テ三〇オノ年ノ始メニ於ケル生存者ガ八六三七七人アリトシテ、ソノ中ソノ年末即チ三十一オノ年始迄存スルモノガ八五七五七人アリトシテソノ各々ニ一〇〇〇円ヅヽ與ヘル為ニハ　1000円×857575/863777=992.8(円)　ヲ要スル事トナル、之レヲ三十オノ年始ニ於ケル生存者ガ分担スルノ示アルカラ一人当リ　85757500÷863777=99.28(円)　トナル、然ルニ仮定ニヨリ保険料ハ年始ニ収入シ保険金ハ年末ニ支払フトスレバ一年間利子シ得ルカラ、之レヲ年利四分

元割引スレバ　$922.84 \times \frac{1}{1+0.04} = 887.6$(圓)　トナル。之レガ即チ保険料トナル。次ニ長期ニ亘ル生存保険ニ就イテ計算スルト例ヘバ一浪子ニ一〇才ノ人九三六九〇人ガ三〇才ニ於テハ六三七七生キ残ルモノトナッテ居リ、而モ之ノ人々ニ各々千円ヲ與ヘル為ニハ $863700 \times 1000 = 863700000$(圓)　ヲ要ス。之ハ年后ニ必要トスルノ元アルカラ、ソノ原價、$863700000 \times (\frac{1}{1+0.04})^{10}$ トナル。而シテ之ヲ二十才ノ年ノ始メニ於ル生存者九三六九〇人ニ割ルト一人当リノ一時払保険料ガ得ラル。次ニ之ヲ年払保険料ニ換算スル為ニハ之レニ該当スル生命年金ノ原價ニ除スレバ足ル、基数式ニ表ハセバ　$\frac{D_{x+n}}{N_{x-1}-N_{x+n-1}}$　トナル故　$\frac{D_{30+10}}{N_{19}-N_{39}}$　トシテ計算サレル。

上ニ掲ゲタ場合ハ基本的ナモノデアリ、実際上ニ行ハレテ居ル保険ハ種々アリ、実ハ上述ノモノヲ適宜ニ組合ハセタモノニ外ナラヌ。今一、二ノ例ヲトク。

(一) 養老保険即チ生死混合保険トハ、今后何年以内ニ死亡スレバ保険金ヲ與ヘルト共ニ其ノ期間ヲ満了ノトキマデ生キテ居レバ保険金ヲ與ヘルトイフモノニ元アル故定期保険ト生存保険トヲ結ビ付ケタモノニ元アル、從ッテ前述ノ方法ニヨッテコノ二種ノ保険ヲ別々ニ計算シ之ヲ合計シタモノガ即チ養老保険ノ保険料ニアル、

イ、死亡保険（定期保険）

或ル年齢以内ニ死亡スレバ金ヲヤル、年齢迄生キレバ消滅スル

ロ、生存保険

或ル年齢以内ニ死亡スレバ消滅スル、ソノ年齢末マデ生存スレバ金ヲヤル、

トイフ二ツノ契約ヲ同時ニスル事トナル、

(二) 養老保険ニ於テ死亡者ニハ一定額ヲ與ヘルガ生存者ニハ其ノ二倍ヲ與ヘルトイフ契約ナラバ、例ヘバ死亡保険ノ部分（A）ノ保険料ハ保険金一〇〇〇ロトシテ計算シ生存保険（B）ノ部分ハ一〇〇〇円トシテ計算シ、之レヲ合計スレバ足ル、

(三) 生存保険ニ於テ若シ、ソノ條件ヲ厳重ニ行フト甚ダ不評判ニナル、即チ生

存者ニハ金ヲヤルガ期限前ノ死亡者ニハ保険料ヲ掛ケ除テサセルダケデ払戻金ヲ出カヌト云フ非難ヲ受ケル、コノ非難ヲ免レル為ニハ死亡者ニハ払込ンダ保険料ニ相当スル額ヲ返還スルトイフガ如キ方法ヲ採ル、彼ッテ欧米諸国ニ行ハレテ居ル生存保険ハ皆コノ條件ガアル、コノ場合ニハ保険料ノ外ニ特別ナ形ノ死亡保険ヲ附ケ加ヘタ生死混合保険ニ帰着スル、ソノ死亡保険トハ第一年度ノ死亡者ニハ保険料スニ相当スル保険金ヲ與ヘ二年目ノ死亡者ニハ二又三年目ニハ三又トイフガ如ク保険金逓増ノ死亡保険デアル、

以上ハ純保険料即チ保険金支払ヒノ為ニ必要ナル金額ニ当テル為ノ保険料ノミニツイテ述ベタ、然ルニ保険事業ヲ営ム為ニハ事業費ヲ必要トス、之ヲ純保険料ニ附加シテ被保険者ノ負担セネバナラヌ、之ヲ計算スル為ニハ、色々ナ方法ガ考案サレテ居ルガ、ソノ負担ヲ公平ニスル為ニハ新契約ヲ締結ニ必要ナル費用ト其ノ后ノ契約断続中ニ要スル費用トニツイテ分類シテ凡テノ契約者ニナルベク公平ナ負担ヲナシ得ルヤウニ考ヘネバナラヌ、

尚又利益配当附契約ニアリテハ之ニ備ヘル為ニ特別ノ附加ヲナス事ヲ要ス而シテ純保険料ト附加保険料トヲ合セタモノヲ總保険料トナス、即チ被保険者ノ負担トナル

第四章　責任準備金

生保会社ハ其ノ契約上ノ責任ヲ果スタメニ責任準備金ヲ積立テネバナラヌ、今若シ自然保険料ノ方法ヲ採ルトキハ責任準備金ハアリマセンガ、今日普通ニハ毎年払ノ平準保険料ノ方法ヲ採ルカラ此処ニ責任準備金ガ生ズルノデアル、今定期保険ノ例ヲ取ッテ云ヘバ第一年度払込ノ中カラ、ソノ一年間ノ死亡ノ危険ヲ負担スル為ニ必要ナ危険保険料ヲ除イタ残リガ其ノ積立金デアル、ソウシテ立シニ利息ノ計算ガ加ヘラレ年末ノ積立金トナル、第二年度ニ於テハ其ノ年度ノ保険料カラ其ノ年度ノ危険負担料ヲ除イタ残額ニ前年度末ノ積立金ヲ加ヘタモノガ第二年度ノ年始ニ於ケル積立金トナル、次第ニ同ジ方法ガ繰返サル、

此処ニ私ガ計算シタ一例ニ依ルト二十年満期ノモノトシテ、凡ソ十二年目前后ニ於テ其ノ積立金ガ最大トナル、然ルニ之レヨリ后ハ毎年ノ保険料ガ其ノ年度ノ危険保険料ニ足リナイ故ニ従来カラ繰リ越リレタ積立金ヲ以テ其ノ不足ヲ補フ事トナス、遂ニ満期ニ至リテ〇トナル、コノ計算ニ依リテ吾人ハ左ノ事実ヲ知ツタ、毎年ノ死亡者ニ対スル保険金ノ支払ハ①各々ノ年度ノ危険保険料ヲ以テ之レニ当テル事、②契約ノ初期ニ於テハ積立保険料ガ責任準備金トシテ次第ニ積立テラレテ行ク事　③契約ノ后期ニ至レバコノ積立金ガ危険保険料ノ不足ヲ補フ為ニ利用セラルヽ事　④満期ニ至レバ積立金ハ〇トナルガ故其ノ時ニ於ケル生存者ニ対スル契約ハ全ク消滅スルノミデアリ、過去ニ払込マレタ保険料ニ対シテ何等ノ返還金ガナイモノナリ、

上述ノ定期保険ノ例ハコノ種ノ説明ノ代表的ナモノデアル、然ルニ定期保険ヲ次第ニ長期ノモノニスルト遂ニ終身保険トナル、従ツテ終身保険ハ定期保険ノ一特殊ノ場合デアル、ソウシテ定期保険ノ効限ト見ル事ガ出来ル、然ルニ他方カラ之ヲ見ルト、終身保険ハ養老保険、即チ生死混合保険ノ効限デアル、今其ノ理由ヲ説明スル、

満百才ヲ以テ凡テノ人ガ死ヌトナツテ居ル生命表ガアルト仮定スル、満五十才ノ人ノ一団ニ対シテハ十才満期ノ養老保険ヲ契約シタト仮定シタ、コノ保険ハ定期保険（死亡）ト生存保険トヲ合セタモノナル故定期保険ノ部分ハ前述ノ説明ト同ジク満期ニ至レバ積立金ハ〇トナル、然ルニ生存保険ノ方ヲ見ルト満期ノ生存者ニ対シテ保険金ヲ支払フニ足ル丈ノ金ヲ積立テ置カネバナラヌ、従テコノ養老保険ハ満期ノ際ニモ之ヲ積立金ハ持ツテ居ル、今若シコノ假例ヲ延長シテ九十九才ヲ満期ノ養老保険トシテモソノ道理ハ前述ノモノト同ジデアル、然ルニ今一年進メテ即チ養老保険ノ効限デアルト同時ニ終身保険ト全ク同一ノモノニナル、コノ理由ニ依ツテ終身保険ノ責任準備金ハ左ノ如キ形ヲ採ル、A、一人当リニツイテ計算ヲスルナラバ契約ノ初期ニ於テハ前述ノ定期保険ニ依ルト同ジク毎年末ニ於ケル積立金ハ次第ニ増加スル、而シテ或ル年数ヲ過ギテ危険保険料ガ純保険料ヨリモ大トナル、従ツテ積立保険料ガマイナスニナル時期ニ達シタ后ニ於テモ過去ニ於ケル積立金ガ相当多額ニ達シテ居リ、ソレノ利息ガ不足ヲ補ツテ尚余リアルカラ、積立金ハ増加

スル一方ニアル、而シテ最后ノ年ニ於ル計算ヲ云フト前年度末ノ積立金ニ新年度ノ保険料収入ヲ加ヘタレニ一年間ノ利息ヲ加ヘルト其ノ年末ニハ丁度満面金額ニ達スル、從ツテ其ノ年ノ内、死亡者ニ対シテモ保険金ヲ支払ヘ得ルト同時ニ仮令年度末ニ生存者ガアツテモ、タニ額面金額ヲ支払フ事モ出來ルノ元アル、（但シ仮定ニヨリテ年末ノ生存者ハ〇元アリ、ソテノ人々ガ此ノ年内ニ死又ハ元アル）

(B) 今試ミニコノ終身保険ノ責任準備金ノ計算ヲ被保険者ノ一団体ニツイテ計算スレバ左ノ如キモノトナル。

(1) 年保険数	(2) 年到令達	(3) 被保険者数
1	45	74,143
2	46	73,345
18	62	54,743
22	66	47,361
44	88	2,146
50	94	21
51	95	3

(4) 前年度繰越	(5) 保険料収入 (4)+(5)	(6) 年始現在金
0	2,200,366	2,200,366
1,438,377	2,175,803	3,614,179
26,433,526	1,623,969	22,057,494
21,957,733	1,404,979	23,362,712
1,851,563	63,662	1,915224
19,613	623	20,236
2,843	89	2,932

(12) 一人当り 責任準備金 (10)÷(11)	(11) 年末生存者	(10) 年末残高 責任準備金 (8)−(9)
19.61円	73,345	1,438,377
39.65	72,497	2,874,605
396.12	53,030	21,006,219
485.61	45,291	21,993,594
876.38	1,402	1,228,681
947.60	3	2,843
0	0	20

(9) 死亡保険金支払高	(8) 年末現在金 (6)+(7)	(7) 利子収入 (6)+i
828,000	2,266,377	66,011
848,400	3,722,605	108,425
1,713,000	22,719,219	661,725
2,070,000	24,063,594	700,881
744,000	1,972,681	57,457
18,000	20,843	607
3,000	3,020	88

責任準備金ノ計算ヲ法則ノ形ニ言表ハスト、或ル時ニ於テ会社ガ被保険者ニ対シテ有スル義務ノ量ト権利ノ量トヲ比較シ其ノ差ヲ会社ノ債務ト考ハテ貸借対照表ノ負債ノ部ニ之ヲ掲ゲ以テ損益計算ヲ明カニスルノデアル、換言スレバ会社ノ資産ノ中カラ之丈ノ金額ヲ会社ガ其ノ契約者ニ対スル義務ヲ果ス為ノ準備トシテ留保シ置ク事ヲ要スル金額デアル、抑々会社ガ被保険者　ニ対シテ有スル義務ト云フノハ被保険者ノ死亡又ハ契約満期ニ当ツテ会社ガ支払フベキ保険金ノ現價デアル。之レハ即チ其ノ時ニ於ケル一時払ヘノ純保険料ニ等シイ。次ニ会社ノ権利トハ将来会社ヘ受ケ取ルベキ純保険料ノ現價ニシテ契約ノ

ソウシテ保険契約成立ノ瞬間ニハ双方ノ量ハ相等シク権利義務ハ平衡ニアルガ一度保険料ガ払込マレタ以上ハ権利ハ次第ニ減ジ義務ハ次第ニ増加スル故ニ此処ニ其ノ差額ヲ生ズ、之レ責任準備金ナリ、今説明セル如キ方法ヲ未来観察法ト云フ、数学者ガ計算ヲナスニ当ツテハ常ニコノ方法ヲ用ヒマス、然シ前ニ数字ニテ例示セル方法ハコノ問題ノ説明ニ甚ダ適切ナモノナルガ、常ニ過去ヲ眺メテ居ルカラ、之ヲ過去観察法トイフ、何レノ方法ニヨルモ其ノ計算ノ基礎ハ一定ノ死亡表ト予定利率ニヨルモノナル故ソノ数値ハ常ニ同ジデアル。

責任準備金ヲ計算スルニ当ツテ会社ノ将来ノ権利ヲ単ニ純保険料ノミニツイテ計算シ、附加保険料ヲ考慮ニ加ヘナイト同時ニ又保険契約ノ当初ニ要スル比較的大ナル新契約費ノ問題ヲモ考慮ニ入レナイ所ノモノヲ純保険料式計算方法トイフ。之レガ標準的ナモノデアル、然ルニ新設会社又ハ資力ノ弱イ会社ニアリテハ新契約費ノ支出ニ困難ヲ感ズルガ故ニ所謂 Zillmer 式ヲ独人 Zillmer ガ考案シタノガ盛ンニ用ヒラレテ居ル、コノ方法ニヨレバ第一年度ノ契約ヲ其ノ年限リノ定期保険ト考ヘ、危険保険料丈ハ之ガ為ニ必要トサル、少シモ積立金ヲ要シナイ事ハ考ヘラレル為、之レヲ流用シテ新契約ノ費用ニ当テル、従ツテ会社ノ決算ハ順調ナ形ヲ示ス、而シテ此ノ流用額ハ第二年度以后ノ附加保険料ノ中カラ、之ヲ償還スル、ソウシテ契約ノ最后ノ年ニ至レバ、悉ク之レヲ償還シタコトヽナル計算方法ヲトル、従テ例ヘバ三十才契約ノ終身保険ナラバ、之レ三十才定期ノ三十一才契約ノ終身保険トノ二ツノ部分ニ分離スルノデアル、又若シ三十才契約ニ十年満期ノ養老保険デアルナラバ之レヲ三十

オ契約ノ一年定期保険ノ三十一オ契約ノ十九年満期ノ養元保険トニ分離スルノ
元アル。従ツテ之ヲ一年繰上法トイフ事モアル。コノ方法ハ数理的ニハ合理的
元アルガ元来会社ノ積立金ヲ少ナクシ、ソレ丈会社ノ資力ヲ弱メル故実力ノア
ル会社ハ之ヲ採用セズ、之ニ加フルニ場合ニヨリテハ $N\frac{(N+1)}{2S}$ 式ノ流用額
ガ或ハ多額ニ失スルカ、或ハ其ノ償還期限ガ長期ニ失スルト云フ非難ガアル。
従ツテ、各自ノ保険法ハ金額ト期間ト一方、又ハ双方カラ制限ヲ加ヘルノガ普
通元アル。

生命保険契約ニハ一般ニ責任準備金ガ蓄積セラル。従ツテ保険証券ハ契約ノ
証明書タルト同時ニ一定ノ金銭価格ヲ代表スルモノ元アル。コノ価格ハ即チ責
任準備金元アリ保険証券ノ価格トイフ、商法又ハ保険業法ニ於テ被保険者ノ為
ニ積立テタル金額ナル語ガ用ヒラレテ居ルガ、之レハ其ノ意味ガ必ズシモ明ラ
カ元ハナイ。或ル場合ニハ此ノ責任準備金ヲ指シ、又或ル場合ニハ後ニ述ベル
解約返戻金ヲナス事モアル。要スルニ其ノ内容ハ保険約款ノ定ムル所ニ出ル。
サテコノ積立金ハ会社ガ被保険者ノ為ニ預ツテ置クモノナル故契約ノ解除失效

又ハ会社ガ保険金支払ノ責ニ任ゼザル時ニハ会社ハ之ヲ返還セネバナラヌ。之
ヲ解約価格トイフ、之ハ理論上ハ責任準備金ノ金額元アルベキナルガ実際ニハ
新契約ノ為ニ要シタ未回収部分ヲ控除スル事、其ノ他一、二ノ理由ニヨリテ、
純保険料式積立金カラ一定ノ解約控除金ヲ減額スルノガ常元アル。コノ解約返
戻金ハ契約者ガ何時ニテモ会社ニ請求スベキ金額ナル故、之レヲ会社カラ必要
ニ應ジテ借リ受ケル事ガアル。コノ場合ニハ其ノ借リ受ケ金ヲ返済シナイナラ
バ解約返戻金又ハ保険金ト相殺スル事ヲ條件トスルモノ元アル。之ヲ保険証券
担保貸附ト云フ。コレニハ二ツノ場合ガアル。一ツハ一般金融ノ目的ニ当テル
モノ元アル、第二ハ保険料ノ払込ミニ当テル為ニ借リ入レル場合元アル、之ヲ
特ニ保険料振替貸附ト名附ケル事モアル。サテ契約ノ失效又ハ解除ニ当リテ解
約返戻金ヲ払ヒ戻スト代リニ之ヲ以テ前ノ契約ノ同ジ條件ノモトニ一時払ノ保険
料ニ当テ、保険金ヲ減少シタ所ノ払ヒ済シ保険ヲ契約スル事ガアル、即チ前契
約ノ変更元アツテ、保険料ヲ払ヒ済ミトナシ、其ノ代リ保険金額ヲ解約返戻金
ニ比例シテ減少サレルノ元アル。或ハ又延長保険又ハ保険料ノ自動的払込トイ

フ方法ガアル。之モ解約返戻金ヲ受取ル代リニ之ヲ一時払ヒノ保険料ニ当テルソウシテ前ノ契約ト同ジ金額ノ保険ヲ将来何程ノ間有效ニ継続セシメル事トナス契約ニアル、之レモ亦契約変更ノ一ツノ場合ニ保険料ヲ払ヒ済ミトナシタル定期保険トナルノニアル。

第五章　生命保険ノ諸問題

生命保険ノ中ニ死亡保険ニハ逆選擇ガ強ク行ハレル傾キガアル、之ヲ防クタメニ会社ハ診査ヲ行ッテ健康者ニツイテノミ契約スルノガ普通ニアル。然シ弱体者ニ対シテモ保険料ノ増割其ノ他合理的ナ手段ニヨリテ契約ヲナス事モアル時トシテハ死亡保険ニ就イテ無診査ニ行フ事ガアル。コノ場合ニハ逆選択ニ備ヘル為ニ種々ノ手段ヲ採ル。コノ場合ニハ先ヅ保険取約者ガ常識判断ニ由リテソノ望診ノ結果ヲ報告シマス、次ニ保険申込者ニ対シテ、血歴（ソノ人ノ血統）及ビ病歴（本人ノ既往症）ヲ告知セシメ、若シ虚偽ノ告知ガアレバ保険契約ヲ解除スル権利ヲ留保ス、尚其ノ上簡易保険ニ在リテハ契約后一年以内ノ死亡者ニハ保険料ノ返還ヲナスニ止メ一年半以内ノ死亡者ニハ保険金ノ半額ヲ支払フト云フ如ノ削限期間又ハ待期ヲ設ケテ居ル。但シ之ハ逆選択ヲ防ダタメノモノナル故傳染病又ハ災害ニ由ル死亡ニハ之ヲ適用セズ

生命保険ニ於テ危険ガ若シク増加スル場合ニ於テハ割増保険料ヲ採ルカ或ハ之ヲ採ラズシテ保険金支払ヲ削限スルカ或ハ将来ニ向ッテ契約ヲ解除シテ契約返戻金ヲ返スカノ三方法ノ何レカヲ採ルカ、普通ハ昔ノ特別危険ニ対スル條件ガ厳重ニアッタメガ今日ニハ次第ニ緩和サレルニ至ッタ。

(1) 旅行危険若クハ気候ニ関スル危険ニ付テハ大体ニ於テ世界各國共自由ニスル傾向ガアルガ時トシテハ熱帯地方若クハ未開國ニ向ッテノ旅行又ハ其ノ地方ノ居住者ニ対シテハ制限ヲ加フル事ガアル。

(2) 職業上ノ危険ニ付テハ飛行機ノ製造者又ハ潜水作業者等ニ対シテハ多少ノ割増ヲ要求スル事ガアル外殆ド例外ナシ。

(3) 戦争危険ニ対シテ時トシテ戦争危険ヲ含ンダ所ノ保険ヲ契約スル事ガアル

ガ（勿論保険料ガ幾分カ高イ）一般ハ之ノ危険ヲ負担シナイ。然シ戦時ニ於テ戰爭地ニ赴クモノ及ビ戰地居住者ニ向ツテ其ノ危険ノ契約スル間ハ特別保険料ヲ取リテ戰爭危険ヲ負担スル事ガ最モ普通トシテ行ハレテ居ル

近時我國ニ於テハ貿易生命保険ヲ官業独占ニ行ハシテ居ル。其ノ特色ハ無審査ニアルコト、保険金額ノ最大限リ四、五〇〇円ト制限シタ事　保険料ヲ日掛ケトシタル事、及ビ保険料払込ノ便宜ノ為メ日掛ケ保険料ヲナシ又ハ其ノ倍数トシテ契約シ其金額及ビ年齢ニ応ジテ保険金額ヲ算出スル事ノ点ニアル。之ノ外ニ保険料ヲ徴収スルニ反シ収金人ヲ派遣スル事モ一ノ特色トセラレテ居ル。一体我國ニハ保険料ノ支払ハ持参債務トカシテ居ル。会社ノ集金人ヲ派遣スル慣例ハ一般ニ行ハレテ居ルガ未ダ法律的效果ヲ認メラレテ居ナイ。従テ簡易保険ノ集金人派遣ハ実際上普通保険ト同一ニアルニセヨ、法律上ハ一ノ特色ニアル。然ルニ其他ノ特色ニ至リテモ、例ヘバ保険金ノ少額ナルモノ及ビ保険料月掛ノモノハ普通保険ニ於テモ認可サレテ居ル。保険金ト保険料トノ関係ガ普通保険ノ場合ト同ジニ解セラレルガ、之ハ実際上ニハ大イニ意義ガアルガ理論上ニハ

殆ド問題ニナイ。斯ノ如ク考ヘル時ハ新診査ノ死亡保険ト云フ以外ニハ特長ト見ラルベキモノナシ。併シ乍相対的特長ガ数個集マツタ所ニ自ラ質易保険ト云フ一種特別ノモノガ成立スル。之ガ官業独占事業トシテ行ハレル。

又近時ハ郵便年金ガ政府事業トシテ行ハレテ居ルガ之ハ独占事業デハナイ。抑々金銭上ノ契約ニアツテ其ノ本質的ナ保険ガ人ノ生命ニ関スル事ニアル。而モソレガ多数人ニ向ツテ繰返シ契約セラルヽ場合ニ於テハ之ヲ総称シテ生命保険ト云フ事ガ出来ル、従ツテ郵便年金ヲ始メ一般ニ生命年金ト称セラルヽモノハ生命保険ノ一種ナリ。然シテ政府ハ種々ナル内容ヲ有スル年金事業ヲ行ツテ居ルト同様ノモノハ西洋ニハ民業トシテ盛ンニ行ハレテ居ル、我國ニハ之ヲ見ナイ。而シ乍ラ保険金分割払ノ契約ハ近頃ヤヽ盛ンニナリツヽアルノ、ソレハ普通ナラバ保険金ハ一時金ヲ以テ支払スルノニアルガ、斯クノ如キハ乱費ニオチイリ易イモノニアル。コレヲ防イニハ生活ノ安定ヲハカランントスル為ニハ保険金年金払ガ有益ニアル。更ニ近時ニ至リテハ生命保険信託ナルモノガ行ハレテ来タ、コレハ信託会社ガ保険金受取人トナリソノ保険金ヲ遺族ニ分割払ヲナス

事ヲ目的トスル。

次ニ例ヘバ雇主ガソノ使用人ヲ優遇スル為ノ福利施設トシテ共有組合又ハ恩給制度ヲ設ケル事ガシバ〳〵アルガソノ制度ノ基礎ヲ確実ニスル為ニハ之ヲ保険会社ノ契約ニ附スル事ガ有益ナリ。此ノ目的ヲ以テ団体保険ガ外國ニ行ハレテ居ル。ソノ主ナルモノハ使用人ノ死亡ニ対スル団体生命保険、老年退職者ニ対スル団体恩給保険、傷病ニ対スル団体傷病保険ノ類デアルガ、ソノ〳〵ソノ二又ハ三ヲ一契約ニ結ビツケタノガアル。此ノ場合ニハ逆選択ガナイヤウニ診査ヲ要セズ、又色々ノ勧誘、色々ノ集金ヲ要セザルガ故ニ普シク廉價デアル。米國、加奈陀ニ於テハ之ガ盛ニ行ハレテ居ル。然ルニ西洋ニ於テハ労働保険制度ニ依リテ多数ノ使用人ニ之ト同ジ様ナ保険ガ設定サレテ居ルカラ、団体保険ハ余リ発達セズ、我國ニ於テハ未ダ之ガ行ハレテ居ナイガ生命保険ノ団体的取扱ヒト云フ方法デ之ニ代用スル方法ガ行ハレテ居ル。コレハ各個ノ契約デアルノヲ有診査モノデアルガ保険料ノ支払ガ会社ニ於テ俸給ノ中カラ取リマトメテ拡除スル等ノ便宜ガアルノデ、自然安ク行ハレ、且ツ未統スル長所ガアル。

第二部　火災保険

第一章　保険料ノ標準

保険料ハ火災統計ヲ基準トス。之レニ二種アリ、一般統計ハ一國又ハ一地方ニ生ジタ火災ニ関スルモノデアリ、火災ノ度数、罹災戸数、見積損害額等ヲ記シタモノデ料率算定ノ標準ガ分ル。然ルニ経験統計ハ火災保険ノ目的物ニ就イテ生ジタ火災ノ統計デアリ、他方別、職業別、物件別等ニ分類シ、火災保険協会ガ之レヲ作ル。経験統計ハ料率計算ノ目的ニ適合スルモノナルガ材料不十分ノ為充分信頼シ得ナイ。殊ニ特殊ノモノニ大損害ノアッタトキニソレニ属スル階級ノ危険率ニ大変動ヲ生ズルガ如キ欠点ガアル。併シ又一般統計ハ元来甚ダ不完全デ、物ノ構造別、用途別等ニ就イテ詳細ナ分類ガナク唯概括的ニ地方別ノ罹災率ヲ示スニ過ギズ、故ニ何レニシテモ統計的基礎不充分ノ為、吾々ハ之等ノ統計ニ依リテ危険率ニ関スル一應ノ標準ヲ得。之ニ合理的ナ斟酌ヲ加ヘテ

料率ヲ計算スルヨリ外ニ方法ガナイ我國ニ於ケル火災ノ一般統計トシテハ商工省ガ編纂シタ火災統計表ガ明治二十六年カラ大正十四年ニ至ル、三十三ケ年間ニ五ツノ統計ガ作ラレテ居ル。尚毎年ノ帝國統計年鑑ニハ年々ノ火災統計ヲ掲ゲテ居ル。長期ニ亘ツテコレヲ見レバ罹災率ハ次第ニ低下シテ居ル、コレ建築術　暖房ノ改善、防火、消火ノ術等ノ進歩ノ為デアル、今、地方別ノ罹災率ヲ観ルト例ヘバ大正五年カラ十四年ニ至ル、十ケ年間ノ調査ニ於テ東北六縣デハ 3.1637‰ デアルガ九州六縣ニ於テハ 6.3449‰ デアル。ソノ理由ハ容易ニ諒解シ得ル。之ニヨツテ観ルト一般統計ハソノ不完全ナルニモ拘ラズ、大体ノ基礎トシテ利用シ得ル所以ガ分ル。又火災危険率ハ動機ノ激シイ時ヨリ時トシテハ大火ノ為、統計的基礎ガ破壊サレルトキアリ。例ヘバ

	大正五	六	七	八
山形縣	3,101	2,921	2,979	25,336
茨城縣	4,922	4,990	8,090	3,427

コノ例ノ如シ、コレ危険率ノ測定ニツイテ短期間ノ統計ニヨリ難イ事ヲ示スモノデアル。又單ニ統計ノ数字ノミヲ以テ料率ヲ決定スル不可ナル所以ヲ示シテ居ル。又之レニヨツテ火災保険ニハ大火危険ニ対スル特別積立金ノ必要ナル所以モ肯定シ得ル。今下ニ保険料ノ標準的ノモノガ計算サレル概念ヲ示ス為ニ一例ヲ設ケル、之ハ統計上ノ火害率ニ一割ノ安全率ヲ加ヘテ、之レヲ純保険料ト考ヘ次ニ附加保険料トシテ営業費ヲ總保険料ノ三割五分トナシ、営業利益ヲ總保険料ノ一割ト考ヘタモノデアル。次表ノ通リデアル。

(一)

一割	罹災率	2.446‰
	安全率	0.245
純保険料		2.691

純保険料		$x = 4.893$
営業費		$0.35x = 1.713$
営業利益		$0.10x = 0.489$
附加保険料		$0.45x$

$\therefore x = 2.691 + 0.45x$

$\therefore x = 4.893‰$

今コレヲ反対ノ側カラ的ケ保険営業ノ実績ヨリ観ルナラバ欧米ノ多年ノ経験カラ観レバ営業保険料ハ凡ソ下ノ如ク分類サレルト云フ。

損害填補	35 %
営業費	35 %
営業利益	10 %

之ガ標準的ナリト云ハレテ居ル。

我國ノ成績ヲ観テモ略之ニ近イモノデアル。然ルニ近年ニ至リ営業費ガ高クナツタニモ拘ラズ保険料ハ欧洲大戦前ト大差ナキ為、営業費ノ割合ガ約五十%ニ達シ事業困難ナリト云ハレテ居ル。我國ノ情勢モ同様デアル。

第二章　危険ノ測定

火災保険ニツイテハソノ実体的危険（Physical risk）ト人為的危険（Moral risk）ヲ測定スルヲ要スル。

実体的危険ニ関スル研究ハ火災保険工学者又ハ火災危険測定率（Fire Insurance Tariff）（Fire Insurance Surveying）ノ研究ニ属スル事デアル故、此所ニ詳細ニ述ベル必要ナキモ唯現実ニ火災保険ノ料率ガ如何ニ定メラレテ居ルカ、之ニ就イテ注意スベキ点ヲ述ブ。危険率ノ測定ニツイテハ先ヅ環境ヲ見ナケレバナラヌ。即チ市街地ト農村ト或ヒハ周囲ノ人家、周密ノ状態ヲ見ネバナラヌ、之レ特ニ延焼ノ危険ト関係スル事デアル。第二ハ建物ノ構造ニツイテ注意セネバナラヌ、建築材料ノ注意ノミナラズ、ソノ構造全体ノ注意ヲ観ネバナラヌ。第三ニ建物ノ用途ニ注意スルヲ要ス、之レハ職業上ノ危険ト関聯スル事デアル。第四ニ消防設備ニ関シテ一建物内ノ注意及ビ其ノ社会的設備ニモ注意スルヲ要スル。殊ニ消防設備ニツイテハ火災報知機及ビ自働消火機ノ如キモノノ設備ガ工場其他大建築物ニツイテ最重要視サレテ居ル。

コノ種ノ研究ハ米國ニ於テ最モ発達シ Mac Clure 方面デハ Moore's method ガ行ハレシカブ以西ニ於テハ Dennis method ガ行ハレテ居

ル。

要スルニ之等ノ方法ハ一定ノ標準的建物ヲ基礎トシテ実際ノ被保険物ガ其ノ標準ヲ离レルニ従ツテ一定ノ率ヲ加減スルノモアル。従テ米國モハ料率ノ計算ガ最モ科学的ニ行ハレテ居ル。コレハ米國ニ於テ木造建築又ハ粗末ナ建物ガ多カツタ為火災ノ危険ガ甚シイ事ヨリシテ必要ニ迫ラレテ発達シタノモアル。之ニ反シ欧洲デハ建物ガ優良ナル故料率ノ如キモ恐ラクハ一定シテ従テ危険別定額ガ発達スル必要ガナイ。我國デハ大日本聯合火災保険協会（火保協会）ニ属スル諸会社ガ協定スル料率表ガアル。コレニ依ルト普通物件、綿、絹、毛織、工場、倉庫、油類、収容建物ノ五種ニ分ケテ居ル、今普通物件ニツイテ云フト、先ヅ全國ヲ数区ニ分ケ各区ニ於テ更ニ府縣別ニ分ツ、而シテ多クノ場合ニハ中都会ダケヲ除イテ他ヲ悉ク同等ニ取扱ツテ居ル。而シテ大都会ニ於テハ之レヲ一等地乃至一等地以下数等ニ区別ス、次ニ建物ノ構造ニ関シテハ完全ナ不燃質ナモノヲ一級建物トナシ、普通ノ木造建物ヲ四級トナシ其ノ中間ニ二級ト三級ト分レテ居ル。而シテ職業ニ依リテ割増ヲ加ヘル、又周囲ノ空地ノ状況ニテ割引ラスル、斯クノ如クシテ料率ガ定マル。但シ其ノ詳説ハ省略スル。

昭和八年二月二十三日 印刷
昭和八年二月二十八日 發行
神田区駿河台三丁目七番地
編輯兼發行人 岩瀬利吉
發行所 廣文社

不許複製

終